
総てを識るもの

バシヨウ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

総てを識るもの

【Nコード】

N0519A

【作者名】

バシヨウ

【あらすじ】

中学生の主人公に、ある日一通の手紙が届いた。意味が通らない文章に妙にひかれた主人公は、送り主の指示に従い、示された場所に向かう。そこで待っていたのは…。

第ぜろ話 招待

はじまりは、ある夏の暑い日のことだった。

夏休みを明日にむかえ、さあ何をして遊ぼうかと悩みながら家に着いた僕は、郵便受けの中に一通の封筒を見つけた。

地味な茶封筒に、僕の名前が書いている。

差出人は……書いてないや。

カバンを居間に投げ捨てて、封を開け、中をみる。一枚の地図と、便箋が入っている。

「どこの地図だろ」

呟いて、もう一枚の便箋に目を向けると、こんなことが書いてあった。

『君に総てを教えよう／ここにすれば何もかもがわかる／君の知りたいこと総てが』 ぶ。

あんまり馬鹿馬鹿しくてついつい吹き出してしまった。

全部わかるって？じゃあ宿題の答えでも教えて欲しいもんだ。

ごみ箱に目を向けて 思い止まる。

……うん、でもまあ。

暇だしね。夏休みだし。 財布の中身を思い出しながら地図を手

に取り、駅を探す。 鉢田駅。ここからなら往復でも千円くら

いで帰ってこれる、かな。

よし、決めた！ 夏休み最初の一日は、旅行だ！

忌々しい通信簿をテーブルの上に放り出すと、僕は準備をするために物置に突入した。

えっと、目的地は山だから、水筒と帽子。

それに、虫除けのスプレーかな。

目についたものをザックに詰め込んで、自室に戻り、もう一度地図を眺める。

駅からはバスで近くまで行けるようだ。大体三十分も歩けば着きそ

うだな。

うん。準備はできた。後はぐっすり眠って明日を待つのみ、だな。

結局、緊張したのか、その日はよく眠れなかった。

第ゼロ話 招待（後書き）

大分前に習作として書いた短篇です。再び、人とは違う力を持つてしまった人の話ですが、能力についての世界観はリンクしています。楽しんで読んでくれれば、幸いです。

第いち章 小旅行

夏休み初日、友達からの誘いも蹴って、僕は長柄山へ向かった。地図に示されたのは山の中腹あたりの、何も無い所。少し不安になるが、僕は行かないとならない気がする。

手紙に書いていた言葉。

総てを知っているというのなら、親父のことも知っているのだろう。

一年前に自殺した親父のことも。

親父はたまに考え込んだり、放浪癖がある変な人だったけど、自ら命を断つとはとても信じられない。

だから僕は、たとえ嘘だとしても……。

と、考え事をしてしていると、長柄駅に着く。

ザックを背負って無人駅を出る。

駅前でバス停を探し、市外行き停留所から山のふもとまで乗っていく。

よし、ここからは自分で歩いていくしかない。

気合いを込めて登りはじめる。

固く踏みしめられた土は、登山客の多さを示していて、僕にとってもありがたい。

蒸すような暑ささえ無ければ、ハイキング程度の山道だ。

特に苦労もなく、六合目まで来たところで一度休憩をとった。

汗でべつとりとしているシャツを張り出している枝に干して、水筒からポカリを注ぎ、一気に飲み干す。

「ふいー。あちい」

呻き、目の前に広がるくさむら、というか山そのものを見る。

地図によるとここを抜けていかなければならないようだ……。

ため息を吐き、ザックから長袖の上着を出して、シャツの上にはおる。ぶら下がっているナタを鞘から抜き、

「てりやあ！」

適当な枝を叩き切った。

十分後、荒い息を吐いて僕は木に寄り掛かった。

……調子に乗りすぎた。

これからは邪魔な枝だけを切っつていこう。

ぼたぼたと滴れる汗を拭い、再び歩く。

切り飛ばした枝が二十本を超えた辺りで、小屋の影が見えてきた。

小走りに駆け寄り、大きく息を吐き出す。

ここに、手紙の主がいるのか。

……本当に？いや、悩んでいても始まらない。

「……よし」

覚悟を決め、ノックしようと手を上げ、

「開いてる、入りなさい」

中から声がかかる。

どこから、見ていたんだ？

いや、足音か何かを聞いたんだろう。きっとそつだ。怯えるな

……僕。

僕は気合いを入れ直し、勢い良くドアを開いた。

第に章 全知にして……

「つまり世界は一つであるが故に結果も一つなんだよ……」

「はい……」

「わかるかい？」

「はあ」

全くわかりません。

というか、何故僕はこんな所で世界の在り方についての講義を受けなければならいんだらう。

「まあ、いい」

相槌しかうたない僕から何を読み取ったか、ようやくシロウは演説を止めた。

この妙な男は、僕の名を聞こうとせず、自らをシロウと名乗った。

何か聞きたいことがあるのだろうか？との問いに、僕は父の事を尋ねた。

「ああ。彼は何のドラマもない、単なる自殺さ。原因は……まあ後にでもわかることだよ」

それを聞き、半ば投げ遣りになった僕がした質問、

「じゃあこれからの世界の事でも教えてくれよ」

。これが間違いだった。意味のわからない概念論ばかり二十分も語られて頭が痛くなってきてしまった。

「はあ……。世界についての話はもういいからさ、何かもっと役に立つことはないの？」

にやり、と不精髭の生えた顎を撫で、

「んん？たとえば？」

とシロウ。

「ほら宝くじとか競馬とかさ」

それを聞いてシロウは、はっ、と呆れた様な息をつく。

「おまえらはいつもそうだ。未来が読める？なら株価の予想を試みる。宝くじの番号をあててみる。そもそも自分で稼げ……。ああくだらない！」

何があるうとギャンブルについてはぜってー教えねえ。別にしろ」

突如冷静さを失ったシロウに圧倒されながらも、僕は最初から気になっていた質問を吐く。

すなわち、

「シロウは本当に予知ができるの？」

「おいおい人の話はちゃんときけよ。さっき言ったろ？世界は一つ。結果しかないって。どんなに選択肢があるように見えても、俺には誰がどの選択をするのかわかる」

そこで一息。茶をすすって、

「選ばれなかった世界なんてのは無い。何をしてもそれは最初から選ばれる選択肢を選ばされているにすぎない。……。ある一瞬でもいい。宇宙全ての粒子のベクトルと位置を記録してみる。俺と同じ存在が出来上がる」

べくとる……。？　まあよくわからないけど、本物っぽい事はたしかだ。

「証拠でも見せるか？」

ほれ、と僕に差し出したのは五つのサイコロ。これを振れって

ことか？

「いいか。お前からみて左から、6、6、3、1、6の数字がでる。さあ振れ」

出るわけが、無いだろう。

というか意地で出したくなくなった。

先に三つのサイを振り、3、1、6が出たのを確認し、残り2個のサイを右の方に振った。4、4で止まる。

「出なかつたけど？」

僕の挑発的な言葉に、シロウは意外にも笑顔をかえしてきた。

「くくつ。座布団の下、めくつてみな？」

いやな予感と共に座布団の下を見ると、封筒が。

冷や汗が出るのを感じながら破り、中を見る。

『まずサイコロを三つ振る。』

3、1、6がでた後に右方向に残りのサイを振る。

出目は4、4[『]う、うう？これは、手品なのか？しかし、僕の気紛れを予測するなんて……。

「だから気紛れなんてないんだって。所詮は電気信号の強弱なんだから」

何だ、こいつは？

「お？びびつたかな？」

怖い。

「ふふ、後二十秒で雨が降りだすよ。今日は泊まっていくかい」

馬鹿な。

降水確率はたしか、5%……。

ぼつり、といった音に思考をさえぎられる。

ぼつん、ぼつん、ぱらぱら……。

「どうする？布団はあるけど」

ばん！最後まで聞かず、力いっぱいドアを開け、僕は雨の中、外に飛び出していた。

まだ地面はぬかるんでいない。ふもとまでなら何とかなる。

「聞けセイジ！お前は十年後に就職！その二年後、結婚！その三年後、死ぬんだ！！」

遠くからよく響くシロウの声。

「かんべんしてくれ！」

叫びながら森を駆ける僕は、我ながら常軌を逸しかけていたと思う。

総てを識るもの

第さん章 前夜（前書き）

佐里・主人公、セイジの妻。前章から十二年後、結婚。子供はナシ。

第5章 前夜

あの男、シロウは何者だったのか。

明日で、あれから十五年になる。

就職も結婚も、結局はシロウの予言どおりになってしまった……。

では俺は明日、死ぬのか？それも既に決まっている、と？

「ふざけた話だ」

呟いて、缶に残ったビールを飲み干す。

まだ、俺は28だ。

でかい病気もなく、いたって健康。殺される程の怨みも、たぶん無い。

「くそっ」

こういうのもトラウマというのか？　ここ数か月マトモに眠

った記憶がない。

眠るとかならず悪夢を見てしまい、疲れしか残らないのだ。

冷蔵庫からもう一本缶ビールを取り出す。

いくら飲んでも、不安は消えてくれない。

実際のところは、覚悟はしている。

死んでしまった時のことを考えて遺書も残したし、過剰なくらいに保険には入っている。

本当に明日、事故か何かで死のうとも、佐里ならば保険金でなんとかやっていけるだろう。

喉奥にビールを流し込み、一息つく。

「腹は、決まったかな」

うむ。

いいだろう。

人間いつか死ぬんだ！　なるようになるさ。　一人ごち、寝室に

むかう。

「ん、佐里。まだ起きてた、のか？……って」

襖を開けた先で佐里の目の前にあるのは、薬局の袋と、見覚えのある器具。 たしかあれは 妊娠検査薬。

「さ、り？」

「……」

佐里は壁の方を向っていて、表情がわからない。

まさか、まさかだよな。何で今なんだ。違っていてくれ！

「ふっふふふー！ みなさいセイジ！ ……陽性！」

内なる叫びも届かずに、ビシィっ、と器具をかかげて振り向いた佐里は、満面の笑みを浮かべていた……。

「まじで！？ やったな、おめでとう！」

ああ、演劇をやっていて良かった……。

少なくとも今は一緒に喜べるふりができるから。

そしてその瞬間。

俺はシロウに会いに行くことを決めた。

運命を、変えるために。

第さん章 前夜（後書き）

一気に時をぶっ飛ばしましたが、どうでしょうか？セイジと佐里の
出会いとかは、結構どーでもいいかなと考えたんですが……。かな
り違和感あると思いますが、ついてきてください！

第よん章 衝動

全然変わってない、な。

電車と車で、感覚の違いはあるだろうけど、どこか人を落ち着かせる雰囲気は以前来た時のままだ。

舗装された登山道に乗り入れ、車で途中まで走る。

パシパシとフロントに当たる虫を気にしながら、途中の駐車場に車を置く。

「よし」

後は、昔と同じだな……。

邪魔な木を切り、無心で歩く。

ほんの数分で小屋が見え、ほう、と息をつく。

ナタを放り捨て、ポケットの中のナイフを確認する。

もし、死が免れないなどと言ったら、これを使ってでも…

…！

奥歯を噛み締め、小屋のドアを開ける。

「ようこそ」

「シロウ……」

座布団の用意をして、落ち着いた様子で座っているシロウに、老いは感じなかった。

十年以上たっているというのに、未だ若者の顔つきをしている。

ありえねえ。

改めて、こいつは化け物なのだ、と認識する。

「ふふ、僕が化け物？」

考えていることもわかるのかよ……！

「だから僕はすべてを識っているんだって。きみもいい歳だ。昔僕の言った意味もわかるだろう?」

「……すべての原子のベクトルを把握する、だったか?人間には、いや、そんなことは誰にもできない!」

そう、たとえ科学がどれだけ発達しようとも、未来を知ることなんて出来やしない。

「まあ、多少は勉強したようだけど、ね。それでも、僕は識っているんだよ」

だ、ダメだ。

圧倒される。そこらの子供みたいな顔で、なんなんだ、このプレッシャーは?

「じゃ、じゃあやはり俺は、今年、いや、今日死ぬのか?」

ふっ、と小さく笑うシロウ。

「そうだねえ。後一時間。……午後四時ってところかな?」

「ど、どうしてもか?!」

「ま、しかたないね」

ああ、ちきしょう。そうかい。やっぱりダメなのか。

「で、どうだった?」

にやにやと笑いながら、シロウは、

「自分の寿命を知った人生は?」

なんだって?

「どづいっ……」

「辛かったか？ 苦しかったか？ あきらめたか？ 結婚した時どう思った？ 子供が出来たとした時どう思った？

聞かせるよ。こんなところに閉じこもっていると退屈なんだよ」

こ、こいつは……！

「識ってるっていつても、やっぱり生で聞くとちよっとは楽しめるからよー」

ぎしり、ナイフを握り締める。

「……しね」

小さく呟いた俺の言葉に、ん？と顔を寄せるシロウ。

その喉に、鞘から抜いたナイフを、突き入れる。

柄が肉に触れる感触に、恐る恐る顔を上げ。

にこり、と爽やかに笑いシロウと目が合う。

ああ、やはりおまえは化け物だ。喉突いたんだぞ？

まあ、いいや。

シロウが予測出来ない行動をとれば、とも考えたんだけど、な。所詮は、手のひらの内かよ。

目を閉じる。シロウは、自分に殺意を向けた相手を許しはしないだろう。

やるだけやった。殺せ。

……数十秒程、無言の時間が流れた。

いい加減飽きて目を開けると、そこには床に倒れているシロウの姿があった。

「あれ？、え？」

えっと、何で倒れてるんだ？ つか血塗れだ。

そこまで考えて我に帰る。俺がナイフで刺したからじゃん。

あわてて抱き起こし、

「お、おい！何で避けなかったんだ！？」

ひうひうと、血をたらしながら、

「……じきに、わかる。つぎの……」

「次の？」

「……」

焦点がぼやけ、シロウの体から力が抜ける。

俺が、殺した？
人を。

「う、あ？」

と。
眠い……いや眠っている場合じゃない。死体を、なんとかしない、

がくり、と膝の力が抜けるのがわかり、俺はそのまま気を
失った。

第よん章 衝動（後書き）

携帯で書いていたら電源ボタンを押してしまい半分消滅してしまいました。こんかいはここまでで。次で終わらせマス。

総てを識るもの

さいしゅじょう

手足の先がびりびりと痺れるのを感じ、俺は目を覚ました。

「う、うう？」

いったい俺は何時間……いや、それよりも。ぐるり、とあたりを見渡す。

「死体は……？」

シロウがいた場所には、血の一滴すら残っていなかった。何で……？

山名四郎の死体は六時間二十分前に風化した突然頭の中から声が……いや、知識が沸き出でる。

「う、っわ？」

何だ、何だこれは！？

パニックになりそうな自分を頭を振ることで押さえつける。

山名四郎が死んだことにより、もっとも付近にいた知性体が次の寄生先となった

「き、せい？」

寄生とは他の生物に癒着し…

「うぜー！」

思わず叫び、床を殴りつける。

これが、これがあいつの感じていた感覚なのか？

山名四郎は二百年間寄生先となっていた

「二百、年も……」

待て、あいつはどう見ても若者だった。不老、不死なのか？

不老ではあるが不死ではない。しかし自殺はできない

「えっと……」

つまり、俺はあいつを殺したことで、あいつの能力を受け継いだ、ということかな？

性格にはわれらの能力

われらとは過去にすべての事象を観測したナノマシンの末端
われらは寄生先が無いと絶えてしまう

突然活発に語り始める……いや、脳に詰め込まれる知識。

うめき声を上げながら、俺は床にうずくまり、頭を抱えた。

こんな、こんな状況でシロウは二百年も……？

「いやだ、俺には、むりだ……」

俺の体には、ナノマシンから生きていくための最低限の栄養素が
送り込まれているらしく、数日たった今でも大した空腹感を感じな
い。

あれからしばらくの間、俺の脳には過去から未来まで、すべての
情報が叩き込まれた。

佐里の寿命、息子の死に様、孫の、その孫の……。

延々と続いていく連鎖に何度も涙したが、『新たに得た知識』は、
俺の存在する価値も教えてくれた。

この先、何度も俺は歴史を修正していく。

長い間ナノマシンの寄生先だった人々と同じように。

俺は、今期の『神』であることを決め、そしてそれは同時に『高
見誠滋』という名の死をあらわしていた。

さいしゅうしょう(後書き)

一人称では説明がしにくいですね…色々裏設定とか考えたけど生かされなかつたつす。ま、ひとまず終わりってことで。次は人殺の姫の続き書きますー！

総てを識るもの

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0519a/>

総てを識るもの

2008年11月7日06時39分発行